



岩手が生んだ愛唱歌

「北上夜曲」誕生物語

# 菊地規

日中戦争の真つ只中の一九四一年（昭和十六年）二月、まさに軍歌や行進曲全盛の中で「北上夜曲」は生まれた。当時作詞者の菊地規は十八歳、作曲者の安藤睦夫は十七歳。歌にもりこまれた青春のロマンチズムは、軍国の風潮に対する、若者のささやかな反抗でもあった。

作詞者の菊地規は、一九二三年（大正十二年）江刺郡田原村原体（現・奥州市江刺区田原）に生まれた。水沢農学校（現・水沢農業高校）在学中から作詞をはじめ、友達と同人誌を発行するなど、文学の創作活動をしていた。

当時、水沢農学校には、安藤という配属将校がおり、規ら文学青年は安藤の下宿に出入りしていた。この将校が安藤睦夫の叔父にあたる。旧制八戸中学（現・青森県立八戸高校）の生徒であった睦夫は、叔父の下宿を訪れ規と出会い、意気投合。歌を作る約束をした。

睦夫に曲をつけてもらうために、一九四〇年（昭和十五年）十二

月に規が初めて作詞した七五調の定型詩が「北上夜曲」だった。翌十六年二月、睦夫は規から渡された歌詞の曲作りに没頭。試験勉強がおろそかになり、危うく留年するところだったという。

盛岡市の岩手師範学校に進んだ規は、寮でオルガンを弾きながら、級友と「北上夜曲」を歌った。卒業後は小学校の教師として岩手県内の各地に赴任した。

睦夫も、勤労働員先で、仲間と「北上夜曲」を合唱した。

こうして、この歌は暗い時代に咲く日陰の花のように岩手県の若人の胸に広がり、やがて敗戦を迎えた。

その後、規、睦夫も、ともに教師の道を進んだ。

一九五七年（昭和三十二年）、広島県呉市で第一回青少年赤字リーダー研修会が開かれ、仙台代表として参加した高校生から「北上夜曲」が披露された。参加者は、この歌をノートに記して大合唱し、会のテーマソングに決定した。歌は、参加者によって全国に広められ、若者達の心から心に伝えられた。

日本がようやく敗戦から立ち直り、高度経済成長期に向かおうという一九六〇年頃、全国津々浦々に現れた歌声喫茶で、「北上夜曲」は大いに歌われた。しかし、流行を続けながらも作者が分からず、作者不明という事情がますますこの歌を神秘的なものにした。

一九六一年（昭和三十六）になり、作者が名乗り出た。作詞は、江刺市出身（現 奥州市江刺区出身）の菊地規、作曲は、種市町（現・洋野町）出身安藤睦夫であった。「北上夜曲」の作者が分かり、この歌が、実はあの暗い時代に十代の手によって作られていたという話題は、当時一大センセーションを巻き起こした。

この歌はいくつものレコード会社が競作した。和田弘とマヒナスターズ、ダークダックス、菅原都々子さん他レコード会社六社が十二種類のレコードを発売し、新聞、週刊誌は競って記事を掲載した。さらに、ソノシート吹き込み三社、NHKラジオドラマ、放送など、ダイヤルを回せばどこかの局が歌謡番組で必ず放送しているほどの日が数カ月も続いた。また、松原智恵子さん（当時十七歳）を初主演に起用した映画をはじめ、映画会社三社の北上川河畔ロケ合戦が繰り広げられた。

菊地規は、一九八九年（平成元）一月二十六日、六十六歳で死去した。

このように、「北上夜曲」は、国民的愛唱歌として現在も歌い継がれている。

北上夜曲 作詞 菊地 規

作曲 安藤 睦夫

1、匂い優しい 白百合の

濡れているような あの瞳

想い出すのは 想い出すのは

北上河原の 月の夜

2、宵の灯 点すころ

心ほのかな 初恋を

想い出すのは 想い出すのは

北上河原の せせらぎよ

3、銀河の流れ 仰ぎつつ

星を数えた 君と僕

想い出すのは 想い出すのは

北上河原の 星の夜

6、僕は生きるぞ 生きるんだ

君の面影 胸に秘め

想い出すのは 想い出すのは

北上河原の 初恋よ



\*参考文献

「北上夜曲の作詞者 菊地規」

「北上夜曲誕生物語」



親戚と記念撮影 後の右端が菊地規